

No.	提 案 名	提 案 団 体 名	
		代表者氏名	所 属
2	光で彩るまちづくり ～灯せば愉快だ宇都宮～	宇都宮共和大学 都市・アメニティ研究会	
		島山 健	宇都宮共和大学 シティライフ学部
		指導教員 氏 名	山島 哲夫

## 【1. 提案の要旨】

宇都宮市は「第5次宇都宮市総合計画」を策定し、その中で宇都宮市が持つブランド力を向上させる必要性を打ち出している。宇都宮らしさを伝えるブランドメッセージ「住めば 愉快だ 宇都宮」を決定し、まちづくりの本格的なスタートが切られた。

宇都宮を愉快なまちにするためには中心市街地の活性化を図り、まちなかに人を集める仕掛け作りが必要であると考え。しかし、今の宇都宮のまちなかは活気がなくなりつつあり、昼間でも人通りが少ない上に夕方以降は極端に人通りが減少してしまう。暗くて人通りが少ない夜道は、たとえそれが中心市街地であっても危険を感じることもさえる。

現在、宇都宮では、まちなかの居住者を増加させるための取り組みを行っている。二荒山神社の隣に建設中のマンション供給をはじめ、まちなかにマンション建設も行われている。今後は、まちなかで生活する人々が多少増加することは予想される。まちなかに居住者が増加することは、まちの活性化にとって大きな効果があることは確かである。人々がまちなかに定着するためには、まちなかでの暮らしが楽しいことが不可欠であり、その意味でもまちなかに賑わいをもたらすことは重要であると考え。

従って、宇都宮の中心市街地は、昼間の活性化が喫緊の課題ではあるが、当研究会では、極端に寂れてしまった夜間のまちを少しでも明るくし、愉快に過ごせるようにすることを同時に進めていく課題と考え、そのための方法として光を利用した夜間も愉快なまちづくりを実現するための検討を行った。

具体的には灯籠の灯り、ライトアップ、イルミネーションなどを使って宇都宮のまちなかを演出する施策事業の提案をする。

提案にあたり、実際に宇都宮の夜のまちなか（宇都宮駅西口からオリオン通り周辺まで）を歩いて調査した。また他都市の事例として、栃木市の蔵のまちを流れる巴波川、足利フラワーパーク、大谷の大谷石あかり展を視察した。それらを踏まえ、提案を行う。

## 【2. 提案の目標】

宇都宮の夜を光で照らし、人が歩きやすい、集まりやすい環境を作り出すことが第一の目標である。その上で、光や夜のまちなかでの時間を楽しく過ごせるような提案することで、まちなかをもっと愉快にしたいと考えている。

近年、技術の発達が進み、LEDなどの少ないエネルギーで光を灯せるものが登場した。光は生活に必要なだけでなく、使い方によっては人工的に観光資源を作り出すことができ、既存の観光資源と組み合わせればさらに大きな観光資源と成りうるができる。

宇都宮には二荒山神社や城址公園、釜川や松が峰教会など夜間にライトアップを行っている箇所がいくつかあり、期間限定でまちなかのイルミネーションも行われている。しかし実

際のところ、その景色を目当てにやってくる人々は少なく感じる。この提案を通して宇都宮に光を灯し、もっと魅力あるまちになることを目指したい。

### 【3. 光（灯り）の効果と LED の可能性】

提案の前に光（灯り）の効果について説明する。また、近年普及が進んだ LED ライトの可能性についても考えたい。

#### 3.1 光（灯り）の効果

光（灯り）には様々な役割が考えられる。もちろん、暗いところを明るくする「照明」が本来の役割であるが、まちを明るくすることにより様々な効果が表れる。さらに、灯りは昼間には考えられないような演出効果をまちにもたらすことができる。近年は、都市の環境計画として都市計画の中に位置付けられるようになってきている。

##### 《まちにおける光（灯り）の効果》

###### ○暗いところを明るくする

- ・ 安全で安心なまちにできる
- ・ 防災上及び防犯の効果がある
- ・ 人々の交流を可能にする

###### ○灯りによる演出

- ・ 夜間の景観・新たな風景を作り出せる
- ・ 人々を集める観光資源にできる

光（灯り）は、都市に様々な効果をもたらすが、その効果を高めるためには都市の特性を十分に理解する必要がある。人がのんびり散策する場所を極端に明るくすることは逆効果である一方、光そのものを楽しむ場所では十分に演出効果を考えたものを設置する必要がある。

本提案では、宇都宮のまちに適した、光（灯り）の配置と内容を検討することとする。

#### 3.2 LED 照明の可能性

近年、新しい照明として LED の普及が進んでいる。少ないエネルギーで長い寿命を持ち、省エネやエコ性能の重要性が増大している現在、今後さらに様々な場所で使われていくことが予想される。

LED は、省エネということだけに利点があるわけではない。省エネという観点から白熱電球やハロゲンランプの格好をさせて、それらの代替物としても利用されている。LED は少量であれば電源を太陽電池でまかなうことができるため、電気配線工事がいらぬ場合もある。そもそも LED は白熱電球や蛍光灯とはまったく違うものであり、白熱電球や蛍光灯の代替として扱うだけでは LED の特性を十分に生かすことができない、と指摘されている（「光りを彩る、色が輝く」日経 BP 社より）。

LED は照明としての役割はもちろんあるが、それ以外にも多くの可能性を秘めている。灯

りで都市を彩ることもできれば、その印象を一変することもできる。LEDにより、光（灯り）による都市の効果的な演出が可能になったのである。

#### 【4. 宇都宮市民のニーズ】

宇都宮市は平成20年10月に市民を対象に「宇都宮市民を対象とする中心市街地活性化に対する意向調査」を行った。その中に、夜間の宇都宮の中心市街地に対する次のような意見が示されている。

10代 女性	店の閉店時間が早く、夜は寂れて暗い。賑やかなお店があり、街路灯もたくさんあり、安心して歩け、明るいまちにしてほしい。
20代 男性	夜にはまちから人が減り、呼び込みや不良が多く、安心して歩くことができない。子供を育てる環境としてもよくない。
20代 女性	店の閉まる時間が早く、空き店舗も放置されたままで、景観上も印象が悪く、汚く、閑散としているイメージを感じる。
50代 男性	夜8時以降になるとほとんどの店舗が店を閉めてしまうため、繁華街（オリオン通りなど）を歩いても暗い寂れた感じが強い。

このように、宇都宮の中心市街地の夜に対しては極めて悪いイメージが定着していることがわかる。暗く寂しい、店の閉店時間が早い、賑わっていない、危険を感じるなど、特に若い人の中にこうした意見が多いことは、夜のまちなかを早急に改善する必要があることを示唆している。

市民は宇都宮のまちなかをこのままにしてはいけなく感じているのであり、良くなって欲しい、この現状を改善してほしいという想いを強く抱いているのである。

#### 【5. 現状の分析と課題】

提案にあたり実際に宇都宮のまちなか（宇都宮駅西口からオリオン通り周辺まで）の夜の様子を調査した。それを踏まえ、現状の問題と課題を整理する。

##### 5.1 “イメージ”としての明るさの問題

###### 《現状》

『宇都宮のまちなかが暗い』という意見が多いということは前述した。しかし、宇都宮のまちなかの夜を実際に調査して感じたことは、当然のことながら、街灯や建物からこぼれる灯りがあり、人が危険を感じるほど暗いわけではないということである。



写真1 パルコ前



写真2 オリオン通り

写真1と写真2は土曜日の午後6時頃のまちなかの様子である。街灯や建物の灯りはあっても、オリオン通りは人通りが殆どないことがわかる。市民が感じる“暗さ”とは、街灯や建物の灯りが足りないのではなく、賑わいがあって人々が多く集まるような、“明るいイメージ”が感じられないからであると考えられる。

### 《課題》

宇都宮のまちなかが暗いイメージとなってしまった原因には、商店街の賑わいのなさや、建物の老朽化などが挙げられる。しかし、これらの根本的な問題の解決には長い年月と多くの労力を要する。

しかし、光（灯り）を使って夜を彩れば短期間で景色と印象をガラッと変えることができるのではないだろうか。上記のパルコ前やオリオン通りは宇都宮の一番の中心地であり、宇都宮のまちの核（心のよりどころ）として人々の生活にとっては今なお必要であると考えられる。宇都宮の拠点としてこの場所に“明るいイメージ”を持たせることが求められている。

## 5.2 光と光の繋がりが無い問題

### 《現状》

宇都宮には二荒山神社前や城址公園、松が峰教会、釜川など夜間にライトアップを行っている箇所がいくつかある。二荒山神社前や城址公園は周辺も整備されていて、夜は昼間と違った幻想的な美しさを見せている。

しかしここで問題にしたいのは、それらを繋ぐ道のみが閑散としていて人通りが少なく、歩いていても楽しさや親しみやすさが感じられないことである。



写真3 二荒山神社の鳥居



写真4 城址公園



写真5 釜川



写真6 松が峰教会

下の写真は二荒山神社から城址公園までを結ぶ道路である。



写真7 バンバ通り



写真8 みはし通り

#### 《課題》

閑散さと人通りが少ないことから、どうしても暗いイメージになってしまう。この通りの地面は、石畳やレンガなどが敷いてあり、他の道路と区別してある。この通りは宇都宮の歴史軸でもあり、本来ならばもっと有効利用されるべき場所でもある。この場所を光（灯り）で彩ることで、宇都宮の特徴・歴史を活かすことが可能となる。

### 5.3 空き店舗増加や閉店時間が早い店舗の問題

#### 《現状》

中心市街地が暗いイメージになってしまった理由に、空き店舗の増加が挙げられる。また閉店時間の早い店舗が多く、夕方の時点で店を閉めてしまう場合がある。その結果、夜には賑わいをなくし、市民にとって商店街が寂れた印象に結びつきやすくなってしまっている。

#### 《課題》

宇都宮を明るいまちにするには、まちなかの店舗に夜も灯りが点いていることが必要である。空き店舗はそのままにしておくより、イベント期間などには臨時のカフェや休憩所など何らかの利用をすることでまちなかに新しいスペースの提供と灯りをもたらすことができる。また閉店時間を延ばすか、早めに閉店せざるを得ない店舗では一定時間は照明をつけている等の取り組みも必要と考えられる。

## 5.4 光のまちづくりに参考となる都市

当研究会では栃木市の蔵のまちを流れる巴波川、足利フラワーパークのイルミネーション、大谷での大谷石あかり展を視察した。またそれらと宇都宮を比較してみる。

### 5.4.1 栃木市蔵のまち巴波川（うずま冬ほたるキラフェス）

栃木駅から徒歩 10 分、蔵のまちを流れる巴波川を約 600 メートルにわたり、3 万個の発光ダイオードが夜のまち並みを明るく照らしている。白い発光ダイオードで飾り、ほたるをイメージさせるような光が水面に映えて幻想的な空間を演出している。



写真 9 蔵のまち並みと巴波川



写真 10 巴波川に架かる橋

#### 《宇都宮との比較》

宇都宮には中心市街地を流れる釜川がある。この川は先ほど述べたように夜間にライトアップを行っているが、足を止めて景色を見ている人はあまりいない。単純なライトアップではなく、場所によってはイルミネーションをつけて、新たな風景を作り出すことにより、人々の関心と呼ぶことにつながると思われる。

### 5.4.2 足利フラワーパーク

「光の花の庭」と題し、100 万個の電球で園内を彩っている。約 1200 畳の大藤棚にフジを彩った光が敷き詰められ、まさに「光の花の庭」の名に相応しい幻想的な雰囲気を演出している。また、様々な花や木々、モニュメントなどが大々的に照らされていて、サンタクロースやトナカイ、大型のクリスマスツリーなど季節のものが並べられている。



写真 11 園内中心部の様子



写真 12 フジを模した光のトンネル

### 《宇都宮との比較》

こうした大々的にイルミネーションのイベントを開催することで、大きなインパクトを与えることができる。また、多くの都市で既に光によるまちづくりを進めていることから、イベントをやるのであれば、思い切ったことをする必要がある。宇都宮にもまちなかにも城址公園やオリオンスクエア広場、二荒山神社前などがあるので、活用できることが考えられる。

#### 5.4.3 大谷石あかり展

大谷では、大谷石の灯籠を使ってあかり展を開催している。大谷石からこぼれ落ちるキャンドルの火が会場を幻想的な空間に変貌させていて、自然な灯りが落ち着いた雰囲気醸し出している。

### 《宇都宮の場合》

宇都宮には大谷石を利用した建築物がいくつもある。また大谷石は市民にとっても親しみやすいものである。大谷石を活用することで、まち並みの向上が期待できる。



写真 13 大谷石の灯籠

#### 5.4.4 宇都宮のイルミネーション

宇都宮では11月中旬から1月初旬まで、中心市街地でイルミネーションイベントを開催している。

主催は宇都宮市中心市街地ライトアップ実行委員会である。2009年度の事業収支決算によると、内容はシンボルロード街路樹 45 本、まちかど広場街路樹 14 本と大とちの木、広場ステージなどへのイルミネーション、中央福祉センター壁面のイルミネーションを施し、時間は17時から22時まで、54日間点灯した（費用は約360万円）。



写真 14 オリオンスクエア(2010年撮影)

今年度のイルミネーションの点灯の日（11月18日）は、オリオンスクエア広場でコンサートなども開かれ、平日にもかかわらず多くの市民で賑わっていた。これは見方を変えれば、イルミネーションやイベントは、人を集める力があることを示しているといえる。

### 《参考にした都市から考えるべきこと》

栃木市であれば蔵のまち並みがあることから、蔵を光で飾り付けることにより景色を作り出している。足利フラワーパークは花と光で夜の風景を彩っている。大谷では大谷石を利用

した光で演出している。宇都宮なら宇都宮らしさを考えた光の演出を行うことが望ましい。

では宇都宮らしさとは何か。当研究会では、宇都宮に現在ある資源を有効に活用することが大切であると考えた。宇都宮の中心市街地にある資源を前提に、次の施策事業を提案する。

## 【6. 施策事業の提案】

光（灯り）を使って夜を彩れば、短期間で景色と印象をガラッと変えることができる。そして宇都宮には活用できる既存の資源がある。以上を軸に、光のまちづくりを提案する。

提案のツールとして、灯籠の灯り、ライトアップ、イルミネーションの3つを用いる。

提案は大きく2つある。1つ目は夜間の散策をするための明かりを灯すことであり、持続的な施策事業の提案である。2つ目は期間を定めて行う光のまちづくりのためのイベントの実施である。イルミネーションのイベントはすでに開催されているが、それに付随するもの、またそれをより効果的に魅せるための提案である。

最初の提案は、宇都宮のまちなかの夜が人々で賑わうようにするためのものであり、2番目の提案は「光のまち宇都宮」をアピールするための提案である。

### 6.1 夜間の散策をするための光（灯り）

#### ア) 二荒山前からオリオン通り、城址公園までの道を灯籠の光で照らす

二荒山前から城址公園までの道は宇都宮の歴史軸であり、パルコ前の大通りは人通りもある。道路は石畳で舗装されており、灯籠を設置することで落ち着いた雰囲気演出することができる。またシンボルロードから松が峰教会までの間も灯籠を置くことで、松が峰教会の灯りを引き立てることができる。二荒山神社前、オリオンスクエア広場、城址公園などは、光がつながることで、光のイベント会場に活用することもできる。（例 灯籠祭りなど）

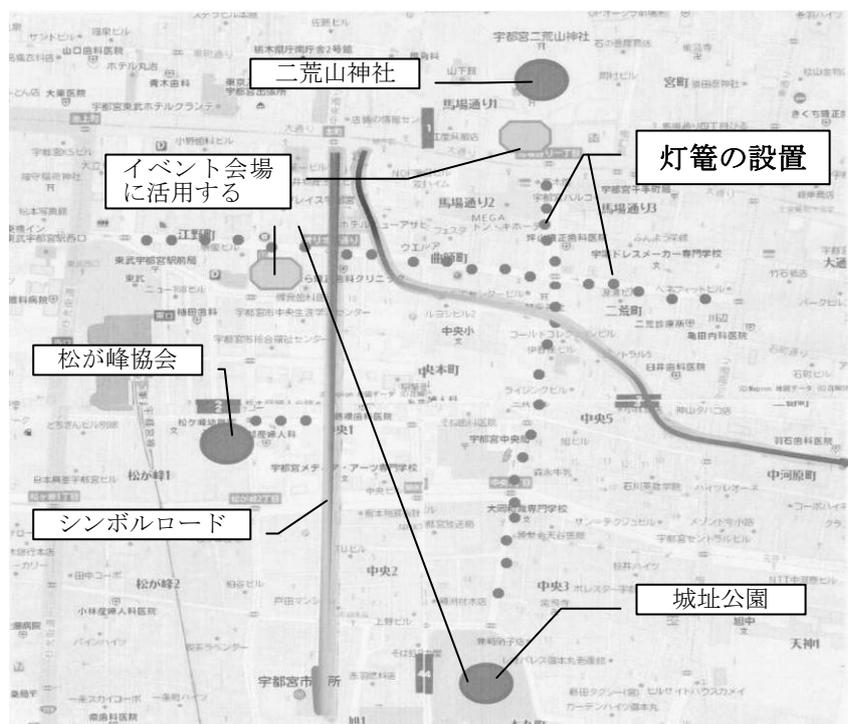


図1

灯籠の設置場所と夜間の光の配置図

現在、二荒山神社、城址公園などがライトアップされていて、冬季にはオリオンスクエアやシンボルロードのイルミネーションが設置されているが、これらを結ぶ線を強化することにより、人々はこれらの間を楽しく歩く（散策する）ことができる。

なお、この灯籠の設置は冬季に限定するものではなく、一年中、宇都宮の夜を光で灯すことを考える。

オリオン通りにも灯籠を設置することで、より散策しやすい環境を作り出し、同時に光を灯すことで、現状の問題で述べた課題の解決へとつなげることができる。

#### イ) 灯籠のデザインを工夫する

灯籠には大谷石を利用する。大谷石の灯籠には LED の電球を用いる。大谷石の値段は大きさに異なるが、小さいものは数千円からある。足元に光が灯るだけでも景観やイメージは向上する。灯籠は通りごとに特徴のあるデザインのものとする。通りの名前の由来等を織り込んだデザインとすれば、通りのイメージアップにつながる。広く一般にデザインを募集することも効果的と考える。



写真 16 様々なデザインの灯籠

#### ウ) ライトアップする建物を増加させる

現在、二荒山神社、松が峰教会、城址公園などでライトアップが行われているが、中心部には多数の大谷石の建物が存在する。大谷石の建物はライトアップすることにより様々な表情を表すことが可能であり、徐々にでもライトアップする建物が増加すれば、まちなかを散策する楽しみは格段に増加する。また、大谷石に限らず、他の建物や樹木、公園などでも効果は期待できる。

#### エ) LED ライトを路地などに埋め込む

LED ライトは、電源を太陽光等からとれることから、道路などに埋め込んで使用することができる。現在、宇都宮駅の東口広場の景観水路の前にも埋め込まれているが、灯籠を置くことが出来ない路地的な街路にも灯りをともすことができる。

## 6.2 光のまちを盛り上げるためのイベント

#### オ) 釜川をイルミネーションで飾る

釜川は宇都宮市内を流れる一級河川である。釜川沿いには散策路が用意されており、イルミネーションを眺めながら歩く事が出来る。

栃木市の巴波川は約 600 メートルにわたり、3 万個の LED が設置されている。大通りの南側の中心市街地に流れている釜川の延長も 6~700 メートルであり、巴波川と同様に LED を設置することでも景色を一変させる効果が期待できる。

### カ) 市役所から県庁へ通ずるシンボルロードに大々的なイルミネーションを施す

「光のまち宇都宮」のイベントの際には、写真 17 のような大々的なイルミネーションをシンボルロード沿いに設置する。この通りは、比較的緑も多く、道路幅も十分にあることから、効果的なイルミネーションの設置が可能と考えられる。また、県庁前のとちの木を活用したイルミネーションも、木の大きさが大きいことから、デザイン次第では、対外的にも話題性に富むものとする事ができる。



写真 17 東京ミレナリオ(2004年撮影)

### キ) 光のオブジェの募集、コンテストの実施

つくば市では、毎年、市民からアイデアを募集し、それをもとに 100 本のクリスマスツリーを展示するイベントを実施している。宇都宮でも毎年テーマを決めて、市民（あるいは小中学生）からアイデアを募集し、優秀な提案をもとに、二荒山前の広場やオリオンスクエアでイベント期間中に展示することが考えられる。

宇都宮のイルミネーションは、いまだ市民に十分に認識されていない。市民を巻き込んだ光のイベントを実施することにより、市民に身近に灯りを感じてもらうことが可能となる。

## 【8. おわりに】

当研究会では提案にあたり、宇都宮のまちなかの夜の様子や他都市について調査してきた。他都市を調査して感じたことは、その都市ならではの景色やまち並みがあって、そこにライトアップやイルミネーションの要素を加えることにより、夜のまちの魅力を演出していることである。現在の宇都宮の中心市街地の夜は、人によっては危険を感じるほどに寂しく、人々が集まってくるような場所になっていないように思う。(冬季だけの限定したイルミネーションだけではなく、一年中、灯籠などで夜の楽しみをつくるのが大切である。)

しかし、提案でも述べたように、ライトアップできる場所や建物は十分にある。日中は殺風景なところでも、夜間灯りによって魅力的にすることは十分に可能であり、宇都宮より小規模な多くの都市でも、夜を楽しくするために様々な試みが行われている。他の都市でできることを宇都宮でできないはずはないと考える。宇都宮のまちなかに光を灯すことで、人々の心にも光を灯し、もっと愉快的なまちになることが期待される。

#### 参考資料

- ・ 「光を彩る、色が輝く」日経 BP 社